

ろうか……

確か終戦の少し前だったか私の家の前の男の子が近くに落ちた爆弾の真管の部分を持ち遊んでいるうちに爆発し、大きな破片が身体の腹部に突き刺さり、内蔵が青い火焰で燃えただけ、人が多く駆けつけて必死に消火にあたったが、益々燃えるばかりでどうすることもできず、その子の七転八倒の地獄の叫び声が続いたが救助隊が来た時には既に絶命していた。

それでも黄燐が肉を焦がして燃え続けた。

私は傍近くで遊んでいて目の前で見た。そしてかなり遠い所を歩いていた二人の女の人も飛んで来た破片が当り即死した。

子どもの母親が外から帰って来て狂い叫んだ。

救助隊が担架に載せて運ぶその子

の上に母親が覆い被って燃える黄燐を消そうとして着ている服に燃え移っていた。

あの時の惨い残酷な光景、肉片は焦げる匂いと黄燐の臭気……五十年経った今でも絶対忘れることが出来ない。今こうして生きていられることも不思議に思える。

また私にはもう一つ心に深く残っている想い出がある。

私の生家の裏庭から土地続きで広い大きな修行道場の禅寺があった。十九年頃からそこに度度陸軍兵士達が寄宿していた。その広い境内の松林の中には何台もの高射砲が隠されて置いてあった。空爆の激しい日には時々高射砲が火をふいた。が敵機は一度も撃墜したことはなかった。

(街の真中だから撃ち落しては危険)

勿論威嚇であったと思う。

その頃その寺は外部から出入厳禁となっていたので軍人の宿泊等は秘密にしていた様だ。

兵士達は昼間は行動せず、夜になったら皆動き始めていた。私の家から総て見えた。

そしていつの頃からか私の家の離れの部屋に未だ二十歳前の若い空軍の兵士達が寄宿することになった。彼等は五人グループ位で、五日間泊っては次の新しいグループと交代して夜にそっと寺の方へ帰って行った。市内の他の寺でも兵士が寄宿していたそうである。(私の父がその寺の総代であり区長を勤めていたので兵士のことは絶対に口外しなかった)

母は祖母と一緒に三度の食事をつくってあげ彼等を心よく賄ってあげ